

カラーズ

2話「自由な捕囚ともっと自由な監禁者」

ここに拉致されて二週間が過ぎた。僕は町外れのお屋敷に連れてこられたのだが、扱いは拉致という言葉とはちょっと違い、拘束などはされていない。

それでも、いろいろと制約があって、今日、ようやく外出が許されるようになったので、屋敷からしばらく歩いて行くとある川沿いの道を歩いていた。

何にもない。

屋敷からここまで何もなし。それが今の感想である。が、それは都会と比べてであって、ここにあるそれはとても大切な物のような気がした。

川は綺麗な水色で、僕の住んでいた街より、この自然は豊かなのだと実感する。

しばらく歩いていくと、古い石で出来た橋があった。

「ほんとにここは時代的だな」

かなり雰囲気のある石橋は、古いのに叩いても壊れそうにないくらい頑丈そうだった。

「えっと、ここを超えていくと町があって、そこに商店街があるっていったなあ」

狭い町の割にはいい品物が揃っていると、アカが言っていたのを思い出す。すれ違う行商人を見ていると、本当にそうだと思った。

「それで、この道を真っ直ぐ行くと、田園に行くと」

道なりにずっと目を向けると、水車が建っているのが見える。

「アカの話だと、この先に葡萄園とかあってそこのお酒が美味しいらしいけど」

なんで未成年のアカがお酒の味を知っているかは、その話が出た時に追求はしなかった。

「とりあえず、僕の知識としては、この町がこの川と石橋を境に、農村都市と商業都市の二面性を持つってぐらいかな」

都市というには少し規模が小さいが・・・。

そして、来た道を戻ると、僕がやってきた屋敷があって、今はそこにアカとアオと暮らし(監禁? され)ている。

「とりあえず、監禁されている身だし、町の方まで行くのはまずいかなあ」

と考えていると、橋の下の方から鼻歌が聞こえてきた。

下を覗くと、橋に反対側に石で出来た階段があって、その下の栈橋にアオがいた。どうやら、歌っているのはアオがらしい。

歌はアオの雰囲気似合った、色で例えると透明な歌。

僕はその歌に誘われるように、階段を下りていった。

アオは白い貫頭衣を着ていて、靴を脱いで素足を川に浸して、目を瞑ったまま鼻歌を口ずさんでいる。

そんなアオの姿を見ていると、声を掛けるのがためらわれて、しばらくじっと彼女を見ていた。

しばらくの後、急に歌声が止む。

「何？」

振り返ったアオの顔は、最初の印象どおり無感情だった。

「いや、綺麗な歌声だなあって」

「そう、ありがとう」

せっかく褒めているのに、アオは冷淡で。せめて、はにかんでくれたらと思う。

「ねえ、アオ。ここはどこなのかなあ。ここに来たとき夜だったから、車がどっちに向かっているとかが良くわからなかったんだ」

「マスターになってくれないなら言わない」

「あ、そう。でも、僕は君たちみたいに強くないし、君たちのマスターになんてなれないと思うんだけど」

「なれるとか、なれないじゃなくて、なってもらわないと困る」

「だから、なんでならないといけないのか言ってくれないと、あんなことまでした君たちを僕は・・・」

許すことが出来ない。とははっきり言えなかった。あんな惨劇の中、僕は彼女たちに見惚れていた、それも罪悪だと思うからだ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

会話が途切れてしまう。アオとの会話はいつもこうだ。いつもなら、アカがいて話をいきなり変えたりしてくれるのだが、今はいない。

「あのさあ、町に行ったことある？」

だから、試しに話を切り出してみた。今まで監禁中の話によると、アオやアカもこの町に来てそれほど時間が経っている訳ではないらしい。

「たまに」

「どんな店があるの？」

「それを聞いてどうするの？」

「えっと、ただ単に自分が今いる町がどういうところなのかなって思ったんだけど」

「そう、逃げ出す気なのかと思った」

逃げ出す。そういう選択肢もあった。けど、そういう可能性のある人間を自由に歩き回らせているアオやアカにも少し問題がある。

「そりゃあね、行商人たちに紛れて逃げ出せるかもしれないと思ったこともあったけど、君たちが僕に危害を加えない気なのはわかったし、それにアカにあんな顔で、「逃げたりしたら、殺すわよ」って言われたから、逃げる気なんてないよ」

アカのあんな顔とはとても口に出しては言えない、そんな顔だ。

「本当に」

「ああ、本当さ」

「そう、ならよかった」

監禁された側と、監禁した側の逃げる逃げないの話なのに、そんな事を感じさせないような空気が流れていて不思議だ。

何より、アオが（多分）笑ったことが嬉しかった。

「こらー、何か私の悪口言ったでしょう」

階段の上のほうから、はっきりとアカだとわかる声が聞こえてきた。

「もう、ずいぶん経ってるのに戻ってこないから、逃げちゃったかと思って追ってきた

ら、アオと楽しそうにしゃべってるなんて、もう、シアンさいてー」

「ずいぶんひどい言い草だね。これでも逃げる気どころか、橋を越える事だって悪いと思って躊躇してたのに」

「あら、そうなの。別にあっちで買い物くらいしてもいいのに」

「あのね、僕は君たちに無一文の状態に拉致されたんだよ。お金なんて持ってないのは前に言っただろう」

「そういえば、そんな事言ってたわね。けど、人間なんてその気になれば他人襲ってお金を得るくらいのことするでしょう」

「そういうのは、本当に貧しい人が、心の病んでいる人で。一応、僕は君たちに心が病むほどひどい扱いを受けているとは思っていないし、危害を与えられない限り、そういうことはしないつもりだよ」

「あら、ずいぶん殊勝でございますこと。それなら、小金ぐらいは貸してあげてもいいわ」

監禁されている身で借金なんてしたくないが、何か必要なものがあったら借りようかと少し思った。

「で、アカ。本当は何しに来たの」

アオが冷淡に言う。

「何しにとって……。ああ、買い物よ」

ああ、僕を探しに来たって言うのはたまたま僕たちを見かけた時の方便で、本当は買い物に来ただけだったのか。

僕はアカに心配されていたわけじゃないことが、少しショックだった。

「食料、まだあったと思ったけど」

「それがね、うちの居候は動きもしないくせによく食べるのよ。おかげで予定より食料の減りが早いから早めの調達って訳」

「うっ」

動きもしない居候というのは僕のことだろう。正直、ここでの食事は美味しくて、ついつuitakusan食べてしまう。

「こういう時、グリーンとかいてくれたら助かるのにねー」

「グリーン？」

「そう、私たちの・・・うーんとなんていうのかな」

「先生」

「そう、先生というか師匠というか、いろんな事を教えてくれた人」

先生というのはわかった、けど、あれ、何か違和感がある

「どうしたのシアン」

「ああ、そうか。呼び付けだ。アカ、僕は同じくらいの歳だし、それでいいと言ったからいいけど、先生とかそういう目上の人を呼びつけしちゃだめだろう」

「そんな事ないわよ、私たち名前はコードネームだから、それに敬称をつけて名前を呼ぶといざという時、それで時間をロスするからダブーなのよ、それ」

「私もグリーンて呼ぶ」

「あ、そうなんだ」

「あっ、何かアオの言葉には素直なんだ」

「えっ、そんな事ないよ」

「いや、絶対そうだ。もうシアンひどい、さいてー」

会った時から思っていたのだが、彼女はさいてーというのが口癖らしい。

「アカ、買い物そろそろ行かないと」

アオがアカを買い物に行けと促す。この辺の二人の呼吸はぴったりあっている。

「じゃあ、行って来るわ、今夜は少し豪勢にしましょう」

そう言えば、あれはかなり美味しいのだが、誰が食事を作っているのだろう。屋敷には僕のほかにアカとアオしかいないけど、二人とも食事を作るような感じには見えない。

「私も行く」

アオが階段を上ろうとした。

「じゃあ、僕も行くよ」

買い物にいっしょに行けば、食材の見方とかでどっちが作っているのかわかるだろう。

「えー、シアンはいいよ。ここのことよくわかってないでしょう」

「でも、荷物持ちくらいは必要だろう？ それに、少しはこの辺のことも（まだ、当分ここにいるのなら）知りたい」

「・・・まあ、そうね。アオ、OK？」

「私は構わない」

「じゃ、いっしょに行きましょう」

あの時のように手を繋いでという訳にはいかないけど、僕ら三人は石橋を渡って商店街

へと向かった。

町は結構な賑わいだった。橋のところでも何人が行商人とあったのだが、どうやらここは大都市への物流の起点になっているらしかった。

そんな賑やかな商店街、そこはアオの独壇場だった。

どっちの店の方がものが安いとか、日持ちのするものを買うならこっちの店だとか、普段無口なくせに指示は的確だった。

それで、あっちこっちの店を歩き回った結果、到底三人分とは思えない量の食材を買い込むことになった。

「お、重いー」

「シアンだらしなーい、たったそれっぽっちの荷物で根をあげるなんて」

手に何一つ持っていないアカが言った。

「それっぽっち？ この両手と背中と首からぶら下げた荷物が少ないって言うの」

「それくらい、アオなら手だけで持てるもの」

「・・・そりゃあ、アオの力ならそれくらい持てるだろうけど」

アオは見た目と違って力持ちだ。鉄製のグローブを自由自在に扱い、屋敷の大きなテーブルも一人で持ち上げて掃除していた。その細い体躯からいったいどうしてそんな力が出ているのか知らないが、その辺の炭鉱夫よりも力があるだろう。

「男でしょ、しっかりしてよ」

「男だからって、一人で持つことはないだろう。君たちも少しは持って」

「い・や」

「即答かよ」

思わず、突っ込んでしまった。

「着いた。ここで最後」

アオはそんな二人の会話を我関せずと目的の店に入っていく。

「あっ、私も行くー」

それに続いて、アカも店の中に入っていってしまう。荷物で身動きの取れない僕は、荷物を降ろして店の壁を背に座り込んだ。

体は汗でベトベトで、手や首には赤い跡が付いているが、それでも気分は悪くなかった。

執事やメイドにかしずかれて過ごす生活に不満はなかったけど、不安はあった。

僕はこのままでいいのかと。

だから、幼い頃の記憶にあったキリカに会いたかった。彼女と会えば、何かが吹っ切れる気がしていた。

だけど、結局彼女とは会うこともできず、アカとアオに拉致されて、知りもしない土地で生きている。

それが何故か心地よい。

二人がキリカに似ているからか、それとも、見ず知らずの地に来たことを喜んでいるのかはわからないが、あの生活には戻りたくない。

僕はずっとここにいたい。蒼い空を見上げながら、そう強く思った。

「こんな生活がいつまでも続けばいいのに」

「なーにが続いて欲しいって？」

「うわっ」

いきなり、背後から声を掛けられた。店の中から飲料水をさらに一袋分持ったアカが出てきた。

「いや、何でもない」

気にも留めず口から出た言葉は、聞き取れないのをいい事に打ち消した。それより、心の声を聞かれた動揺を隠すことの方が先決だった。

「はい、じゃあこれ持って、最後の店に重い水類を選んだアオに感謝しなさいよ」

そんなこと気にも留めないのか、その手に持った袋すら僕に渡そうとするアカ。こいつ、鬼だほんとに。

「やだなー、冗談だってば冗談。はい、アオはその落ちてる袋を拾って、シアンはそれくらいなら大丈夫よね」

アオが三分の二ほどの荷物を軽々と持ち上げる。

「ああ、大丈夫」

残ったのは先ほど両手に持っていた荷物だけ、これくらいなら僕でも持って行ける。

「じゃ、帰りましょう」

帰りましょうと、アカは言う。僕は思わず「どこへ？」を聞きそうになって口をつぐんだ。

それは聞いてはいけないこと。言っただけ聞いてはいけないこと。そして、口にしたら全てが壊れ

る。

「シアン？」

アオがこちらを覗き込むように聞いてきた。

「ああ、帰ろう。僕たちの家へ」

そうだ、帰るんだ。僕たちの家へ。

「二人ともなにやってんのー、行くよー」

さっさと歩き始めていたアカが大声を上げている。

とりあえず、今生きていられればいいから。きっと僕は大丈夫だから。

「アオ、行こうか」

そう言って僕は歩き出す。アオはゆっくりうなずくといっしょに静かに歩き出した。

さっき通った石橋を渡って帰るわけだが、今、僕は耳を塞ぎたかった。でも、手に持っている荷物があるので、当然のようにそれは出来ない。だから、耳を塞ぎたくなるような微妙に下手な歌を止めて欲しい。と発生源のアカに言えないまま、僕たちは石橋を屋敷側まで渡りきった。

アカが鼻歌を歌っている。それはお世辞にも上手いとは言えないような歌で。ここでさっきアオが聞きほれるような鼻歌を歌っていたかと思うと、今聞こえる歌は拷問に近かった。ほら、アオも苦笑している。

「ほら、歩くのおそーい」

何がご機嫌なのか、アカはさっさと行ってしまおう。いくら水類が重いからって、お前の

荷物が一番軽いのを忘れてない？

それで、相変わらず鼻歌は続く。今ここに通行人がいたら、耳を塞いで逃げ去るだろうと思うくらいひどい音程だ。

こういう時は、気を紛らわせば歌も耳に入らなくなるだろうと、僕は隣にいるアオに話しかけた。

「ねえ、アオ。さっき、あそこで何してたの」

「さっきって？」

「ほら、僕と会った時、あの栈橋のところで歌ってたじゃない」

「たまにあすこに涼みに行くの」

ああ、そういえばアオは靴を脱いで、川に足を浸けていたっけ。

「あれ、気持ちいい？」

アオはコクリと無言で頷いた。

「それじゃあ、今度僕もやってみよう。また、歌、歌ってよ（小声）あんな下手じゃない奴」

はるか前の方から、ピクリという擬音が聞こえる。

前を見ると数歩前を闊歩していたアカが、足を止めて、歌を止めて、ゆっくりとこっちへ振り返った。

「なーんか、私の悪口言った？」

「言っていない、言っていない、ほんとアカのことなんて何も言っていないよ」

「そう、それならいんだけど。私の歌が下手だとか何とか、言ってたような気がしただ

け」

本当に、地獄耳だなアカは。でも、ちょうど歌うのを止めてくれたんだ、このまま話に引きずり込んで、あの歌を止めさせてしまおう。

「そう言えばさ、料理って誰が作ってるの」

「えー、わたしー」

とアカから即答が帰ってくる。正直、食事とかそういう繊細なものは、アオの仕事だと思っていた。

「何よ、その顔。私の作るものに何か文句あるの」

「あ、いや、おいしいからさ。誰が作ってるのかなあって」

「えっ、おいしい？ そっかー、シアンも中々味のわかる奴だね。その辺のシェフより美味しい自信はあるんだから」

「その辺どころか、料理は一般的なものだけど、味は一流ホテルに匹敵するよ」

これは本音。あの料理はお金とかそういうのに関係なくおいしい。

「あはっ、そう。こいつー、お世辞なんか言っても何も出ないよ」

「多分、料理が一品増える」

アオが横から口を挟む。アカはおだてれば料理を増やすのか。

「いや、本当。親に連れられて何度かそういうホテルの料理は食べたけど、アカみたいに舌に馴染むって言うのかな。そういうのは初めて」

「えへっ、そう」

声には出ないけれど、アカの顔がもっと言ってと言っている。

「僕だったら、アカの料理に三ツ星出してもいいくらい」

「うん、うん、もっと言って」

とうとう、口に出して要求してきた。

「本当はさ、料理作ってるのアオかと思ってたんだよ。だから、余計に驚いたと言うか、感動したと言うか」

ピクリと、アカの動きが止まる。

「なんで、アオだと思ったの？」

「えっ、だって、アカよりアオの方が器用そうだから・・・」

そして、ヒクリと頬の筋肉が引きつる。

「・・・シアンは食事抜き」

いきなりぱっさり言い捨てられた。

「えっ、何で。何でそういうことになるのさ」

「だって、私を料理もできないがさつな女だと思ってさ。さいてー」

「なっ、それは言葉のあやじゃないか。料理が美味しいと思ったのは事実だし、作ってよ」

「だめ、いや」

「いいよ、いいよ、アカになんて作ってもらわなくたって」

「へえ、自分で料理なんて作れるの？」

「・・・僕にできなくたって・・・アオが作ってくれるさ」

そうだ、あれだけ食材に目端が利くんだ、きっと料理も上手いはず。しかし、ニヤリと

いやらしく笑うアカ。

「ふうん、アオの料理が食べられるの？」

何かそのニュアンスに一抹の不安を感じる。

「ああ、女の子の手料理なら少しくらいまずくたって平気だね」

アカの後でアオがふるふると首を振っている。

「ひょっとしてアオの料理ってひどいの？」

コクリとアオが頷いた。

「男の子が一度言ったことを曲げないよねー、シアン」

「いや、その・・・ごめん、曲げたい」

「だーめ、今日は私はアオと私の分しか料理は作りません。シアンはアオにお願いすればー」

それなら一食ぐらい抜いてもいいかと思ったが、今日は運動したので食事抜きはきつい。

いや、でもな、漫画とかにあるような下手くそ殺人料理じゃあるまいし。

「いいよ、アオにお願いする」

僕は意を決して、そう応えた。

「んっふっふっふ。よかったね、アオ。実験材料になってくれるってー」

ああ、と顔に手を当てるアオ。ひょっとして、漫画の世界のレベル 　　なんでしょう
か？

「ごちそうさまでしたー」

「……………」

アオが挨拶をしないまま、ちらっとこちらを見た。

「どしたの？ シアン。箸が全然進んでないみたいだけどー」

「……ご、ごめんなさい」

「はあ？ なーに？ 聞こえなーい」

「ごめんなさい。僕にはこれ以上食べられません。どうか許してください」

「えー？ なに、全然食べてないじゃない。女の子の作った料理残すなんて、シアン、
さいてー」

いや、そうなんだけど、これはこの世の桁を外れた代物なんだ。

薄緑色のスープは苦さと甘さが絶妙なハーモニー。二人と同じ色の焼き加減のチキンは、見事に味そのものがない。添えられた青物も見事に油の中に沈没していた。

もう無理です。僕にはこれを口に運ぶ勇気がありません。

「んふー。まあ、反省してるみたいね」

アカが寛容の一言を口にする。それで僕は思わず顔を上げると、いつの間にか立ち上がっていたアカが、近付いて来て椅子に座ったままの僕を睥睨していた。

「でも、足りない」

「えっ？」

「謝罪の言葉が足りないでしょ。シ・ア・ン」

「えっと、昼は本当に無神経なことを言いました。すいません」

「足りない……。今後二度とアカ様のことを軽んじるようなことは言いません。でしよ？」

「こ、今後、二度と軽んじるようなことは言いません。……アカ様」

「へー、本心かしら？」

「本心だよ。昼間だって、言葉のあやで、決して悪意はなかったんだから」

「反論するの？」

半眼でこちらを見下ろすアカは、完全にこちらの生殺与奪の権利を持っていた。

「いえ、いいえ。一切、しません。全部、僕が悪かったんです」

「じゃあ、許してあげましょう」

やった。と言おうとして、アカの次の言がその言葉にかぶさるように続く。

「それ、食べたら」

「それ？」

「そう、それ」

アカが顎の先で指すのは、胃というか、すでに本能が拒否している代物だった。

「い、いや。無理だよ。無理。アオには悪いけどこれ以上は食べられないよ」

助けて欲しい気持ち半分でアオの方をチラッと見ると、汗だくで絶対にこっちと目を合わせないように、反対の方向を向いていた。ああ、悪いと思ってんだな。きっと。

「ダメ。明日からの食事を人間の食べるものにしたいのなら、食べるの」

いや、これ、動物だって食べないから……。

「……ぐっ」

最初に切り分けたチキンの一欠けらをフォークに刺して持ち上げる。普通ならそのまま口に運ぶ動作に移るのだが、体がそれを拒否する。ただ、味のない肉の塊なのに、こんなにも無意識に拒絶するなんて、塩って素晴らしいものなんだな。としみじみ思った。

金属と陶器がぶつかり合う音がして、チキンが床に落ちた。頭の中に「無理」という言葉に出ない声が響いた。

「あーあ、もったいない」

アカが勝ち誇った顔をしてこっちを見下ろしていた。

「シアンってお坊ちゃんよねー。戦場なんかじゃ、こんなのちよくちよく食べるって言うのにねー」

こんなものを食べなきゃいけないなら、僕には戦場は無理だと、実感した。もし、この国が徴兵制になったら、僕はきっと亡命する。

「じゃあ、条件を変えましょう」

「ほんと？」

僕の目は輝いていたと思う。まるで、半日お預けをくらった犬の様に。

「スープだけ、飲んだら許してあげる」

「．．．．．あ、あのさ。実はこのスープが一番．．．」

「嫌って言うなら、全部食べなきゃ許さない」

僕は既に二択にすら持ち込めない自分の状況を嘆いた。

「ほら、これなら流動食だし、感覚を頭の外に放り込んで飲み込めばどうにかなるでしょ？」

「本当に、本当に、許してくれる？」

「ええ、だから、飲みなさい」

スープのお皿を僕の口に差し込んできたアカのその目は、まるで獲物を狩る鷹のような喜びと好奇心に溢れていた。

「 % & # x ! 」

わずかな寛容に脅迫されるように喉を物体が嚙下する。僕はまるで他人事のようにそれが流れていくのを感じた。

.....。

「気絶、したのかな？」

声は聞こえるが、自分がどこにいるか感覚はなかった。

「すごいよねー、シアン。アオの料理を飲んだよ。アオが結婚できるのシアンしかいないんじゃない」

それはちょっとと、僅かに脳が拒絶した。

「それにしても、面白かったー。今度からシアンを脅す時は、アオの料理にすれば、なんでも聞いてくれるわね 」

そう楽しそうにしゃべるアカの声を遠くに聞いた。

あとがき

大分、付け足しました。16～19ページはたった一行の文を広げました。本当は、街でシアンがぼんやりと昔の境遇を思うのが、この主題で。アオの殺人料理は、また別の話にしようと思っていたからなんです。けど、まあ、そんなにひっぱることもねーだろうと。初稿から半年以上経った今、思ったわけで。

実質的なところ、11月頃には手直しも終わってたんですが、なんとなくだらだらと今日に至った次第。うが。3ヶ月も放置しちよる。